

Development of Fusion Science Archives in Universities in Japan

松岡啓介^{1,8}、難波忠清^{1,8}、木村一枝¹、花岡幸子¹、大林治夫²、藤田順治^{2,9}、黒田 勉²、寺嶋由之介³、五島敏芳⁴、水内 亨⁵、井澤靖和⁶、平田久子⁷核融合研¹、核融合研名誉教授²、名大名誉教授³、国文研⁴、京大エネ理工研⁵、阪大名誉教授⁶、筑波大物理学系⁷、総研大⁸、総研大名誉教授⁹K. Matsuoka^{1,8}, C. Namba^{1,8}, K. Kimura¹, S. Hanaoka¹, H. Obayashi², J. Fujita^{2,9}, T. Kuroda², Y. Terashima³, H. Gotoh⁴, T. Mizuuchi⁵, Y. Izawa⁶, H. Hirata⁷NIFS¹, Prof. Emeritus of NIFS², Prof. Emeritus of Nagoya Univ.³, NIJL⁴, Kyoto Univ.⁵, Prof. Emeritus of Osaka Univ.⁶,Tsukuba Univ.⁷, Sokendai⁸, Prof. Emeritus of Sokendai⁹matsuoka@nifs.ac.jp

核融合アーカイブ室（以降、アーカイブ室）が核融合科学研究所（NIFS）に発足してから4年目に入った。前回の連合講演会において、大学におけるアーカイブズ活動の概要を紹介した。その後、NIFS や関係する各大学においていくつかの面で進展が見られた。今回は史料の検索に関する進展を主に紹介する。

具体的には、国際標準であるEAD（Encoded Archival Description、符号化記録史料記述）に準拠した公開がインターネット上で一部（約1300件）可能になったことである。史料記述の国際標準にISAD(G)（General International Standard of Archival Description）があり、EADは史料記述の電子情報化の国際標準である。検索のEAD化は、総研大・葉山高等研究センターのプロジェクト研究『大学共同利用機関の歴史とアーカイブズ』の一環として行われ、それが実現したことは、総研大の基盤機関である国文学研究資料館（国文研）、高エネルギー加速器研究機構、分子科学研究所との共同研究の成果である。国文研では古文書・公文書を対象とした史料記述が大いに進んでおり、自然科学の分野の研究者はその成果を参考にした。ISAD(G)には史料整理の基本的な考え方として、次の原則がある。①出所原則による史料群単位の取扱い、原秩序の保存、②整理・取扱いの単位としての階層の存在：Collection、Series、File、Item など、③順序は上の階層から記述する。史料の編成状況を閲覧者に分かりやすくするために階層的な記述を採用している訳であるが、核融合の場合に対応させると、CollectionはA先生からの譲り受けた史料、Seriesはそれらを整理して収納している箱、Itemは個々の史料ということになる。階層毎にそれらがどのようなものであるかについての簡単な説明も付けている。これらを踏まえEADに準拠した検索を実施したのは、自然科学の分野ではアーカイブ室が最初であり、画期的な進展と言っても過言ではない。

これまでにアーカイブ室では18,000件の史料が登録されている。史料の収集は引き続き行われている。時間がかかるが重要な作業は、検索に便宜を図るためのFinding Aids（直訳は検索手段、史料情報を記述した基本となる資料目録）の充実である。史料の保存にあたっては、紙がもっとも信頼性があると言われているが、古い史料についてはマイクロフィッシュ化を順次行っている。史料整理は、京都大学、筑波大学、大阪大学においても進行している。史料は各大学において登録・保存し、Finding Aidsを共通にすることによってお互いに検索出来るようになっていく。研究に関する史料の他に、事務的な公文書も本来は保存の対象とすべきであるが、保存期間が過ぎれば廃棄されているのが現状である。これに関連して、最近行政側にも、公文書の管理・保存体制の整備を推進するため、公文書管理担当大臣の任命や、公文書管理の在り方に関する有識者会議を設置するなどの動きがみられ、アーカイブズの重要性が認識されつつある。これをテコに事務的な側面からもアーカイブズの充実を図るべく努力している。

上記の基本となる作業と平行して、史料を活用した科学史の立場から核融合研究の歴史に関する研究をNIFSの共同研究として行っており、学会などの場で成果を発表している。また、プラズマ・核融合学会50周年記念の企画に際して、アーカイブ室員及び関連する共同研究者は各種座談会の企画・実施や基礎資料（年表、フローチャート）の作成などに中心的な役割を果たした結果、未来への提言や核融合の歴史を新たに掘り起こす等の成果があった。また、これらを通して、我々の活動の認知度が核融合コミュニティにおいて上昇しつつある。